

「いったい、この方はどなたなのだろう」

(マルコによる福音書 4 : 35-41)

船が荒波に飲まれそうになっているとき、狼狽する弟子たちに対し、主イエスは眠っています。完全に神に信頼しているからです。神はその信頼に応じて荒れ狂う波を静められました。これを目の当たりにした弟子たちは恐ろしくなり、「いったい、この方はどなたなのだろう。」と問います。

奇跡物語はイエスという男が誰であるかを指し示す「しるし」です。水戸黄門の印籠を見て、人々が目の前のご老人が何者かを知り、「はは一」となるように、イエス様の奇跡も、それを見たものに、イエス様が何者であるかを知らせます。しかし、印籠とは違って、奇跡によって示されるものは、すぐには理解できないものです。ですから、一体これは何だ？という疑問がまず起こります。しかしこの問から、イエスという男を知る旅がはじまります。

今日の福音にはじまる、マルコによる福音書の 4 章 35 節～8 章 26 節までには、五千人の供食やイエス様が海の上を歩く話しをはじめとする奇跡物語が語られます。この一連の奇跡物語のしめくりである 8 章 29 節では、ペトロが「あなたはメシアです」という信仰告白をします。つまり、一連の奇跡物語によってペトロは、主イエスがメシアであることを知り、信仰告白へと導かれたのです。奇跡は、主イエスが救い主、メシアであることを示す「しるし」だからです。今日の福音で「いったい、この方はどなたなのだろう」という問を得た弟子たちは、これから示される奇跡という「しるし」を目の当たりにすることで、主イエスが救い主、メシアであることを知ることになるのです。

信仰生活において、問うことは禁物なのではなく、むしろ主イエスとのまことの出会いは、主イエスを見つめることで生ずる問いの中で導かれます。主イエスの十字架の死を目の当たりにした百人隊長は、「本当に、この人は神の子だった。」と信仰告白しました。十字架上の主イエスの姿こそ、わたしたちに最大の問を突きつけます。わたしたちは、十字架上の主イエスを見つめるとき、まことの答えへと導かれます。